明治・大正期日本の図書館目録についての議論に関する研究

日本図書館研究会情報組織化研究グループ
月例研究会
2026年5月30日

東京学芸大学特任講師
今野 創祐

本発表の構成

0.はじめに
1.序論
2.明治・大正期日本の目録を巡る議論の概要
3.目録の目的に関する議論
4.目録規則と目録作業の標準化に関する議論
5.目録の形式に関する議論
6.標目統一に関する議論
7.総合考察・結論
（主要参考文献）

0.はじめに

自己紹介　詳しくはhttps://researchmap.jp/imano/?lang=japanese

（主要な）職歴　※非常勤講師等の職歴は省略

2008.4－2009.3　株式会社国書刊行会 営業部　契約社員
2009.4－2010.3　大阪夕陽丘学園高等学校　社会科 非常勤講師
2010.4－2011.3　清教学園中学校　社会科　常勤講師
2011.4－2011.8　東大阪市立日新高等学校定時制　国語科　常勤講師
2011.9－2023.3　京都大学　図書系職員
（文学研究科図書館、附属図書館宇治分館、
工学研究科吉田建築系図書室、
基礎物理学研究所図書室で勤務）
2023.4－現在　東京学芸大学　教育学部　特任講師

（主要な）学歴　※科目等履修等の学歴は省略

2004.4－2008.3　慶應義塾大学商学部商学科
2015.4－2017.3　同志社大学大学院総合政策科学研究科総合政策
科学専攻図書館情報学コース博士前期課程
2017.4－2026.2　筑波大学図書館情報メディア研究科図書館情報メ
ディア専攻博士後期課程
博士（図書館情報学）

本日の発表について

・本日の発表は、私の博士論文の内容の紹介です
・博論を構成する査読論文は以下の２本（いずれもOA）

今野創祐「戦前日本の目録を巡る学説史：大正期を中心に」『日本図書館情報学会誌』65(4),2019,p.147-161.

今野創祐「明治期日本の目録を巡る学説史」『図書館界』71(1),2019,p.2-15.

・現在、つくばリポジトリでは博論の要旨のみ公開されてますが、近日、全文公開の予定
・大幅に書き直した上で図書として出版する予定です

1.序論

研究の背景

・日本の図書館の目録に関する歴史的な研究はわずか
・歴史が長い大学図書館においては古典籍資料を中心にOPACに書誌的データが入力されていない未遡及資料が大量に存在

→それらを検索する手段としては，戦前に作成されたカード目録や冊子体目録を参照するほかない

→戦前に作成されたカード目録や冊子体目録は今なお資料検索のための有用なツール

・これらのツールが作成された戦前の日本で目録を巡ってどのような議論があったのかを調査し，検討することは意義がある

研究の目的

明治から大正にかけての日本の目録を巡る議論の実態を解明すること（欧米の思想の影響や受容の実態についても明らかにする）

→議論の全体像をまずは示した後,主要なテーマごとにより詳細な議論の分析を進める

主要なテーマ

- 目録の目的
- 目録規則と目録作業の標準化の議論
- 目録の形式
- 標目統一の議論

研究の課題

研究課題1：明治・大正期の日本において,目録についてどのような議論が書かれていたかを総体として明らかにする

研究課題2：明治・大正期の日本において,目録の目的についてどのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究課題3：明治・大正期の日本において,目録規則と目録作業の標準化についてどのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究課題4：明治・大正期の日本において,辞書体目録と分類目録,カード目録と冊子体目録といった目録の形式について,どのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究課題5:明治・大正期の日本において,標目統一についてどのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究の意義1

・明治・大正期の日本において目録についてどのような議論が書かれていたかを整理することは,今なお用いられているツールの作成背景の理解につながる
・日本の図書館情報学において,明治・大正期の目録を巡る議論の歴史研究は存在せず,研究史における空白地帯となっていた
→アメリカの思想および実務の「受容史」を研究する意義

研究の意義2

・日本と欧米の間で図書館には文化的な差異が存在
→様々な受容に伴う変化が生じている可能性が高く,その受容のあり方そのものを「受容史」としてまとめることには意義が存在
・従来から存在した書誌学的な議論や実務との融合という側面
→日本と欧米の目録に関する議論の歴史を比較し、日本特有の議論の存在を明らかにする

研究の範囲

・研究対象とする時代：明治期から大正期
・研究対象とする「目録」および文献：
→・体系書誌学に基づき作成された目録に限定
（分析書誌学に基づく目録は除外）
・記述目録法について論じた文献のみ
（主題目録法について論じた文献は除外）
・図書館目録に限定（出版目録は除外）
・図書の目録に加え、論文・記事レベルの目録も研究の対象

研究の方法

文献調査

文献の検索手法

・天野敬太郎が1939年に発表した論文「我ガ国ニ於ケル目録法ノ研究」（※）を用いる
（※1939年までに日本で発表された目録について論じた文献を網羅的に列挙しそれぞれに数行程度のコメントを付けたリスト）
・図書館系の雑誌について,明治から大正にかけての記事,論文を目視でチェック
→見つけた資料および明治から大正にかけて出版された図書館に関する専門書を読み込み,目録に関する記述が存在する箇所を入手
・理論,実務を問わず,およそ目録に関して書かれたすべての議論を対象
→それらの記述から読み取れる理論的な側面にのみ注目

先行研究

1　日本における目録の歴史研究

2　海外における目録の歴史研究

3　日本における図書館情報学の議論史研究

先行研究1：
日本における目録の歴史研究

- 志保田務『日本における図書館目録法の標準化と目録理論の発展に関する研究』学芸図書，2005，238p.
- 澁川雅俊『目録の歴史』勁草書房,1985,212p.
- 藤倉恵一『日本十進分類法の成立と展開：日本の「標準」への道程1928-1949』樹村房,2018,310ｐ.
- 和中幹雄「『学校図書館』誌における記入論争1951～1955」『メタデータ評論』1，2021，p．24-46.

先行研究2：
海外における目録の歴史研究

- Hider, Philip “Origins of the Knowledge Organization Field”, Birger Hjørland and Claudio Gnoli ed., Encyclopedia of Knowledge Organization,2020, https://www.isko.org/cyclo/origins［引用日：2025-07-16］
- Joachim, Martin D. ed., Historical Aspects of Cataloging and Classification, New York, Haworth Information Press, 2003, 604p.
- L.M.チャン（上田修一ほか訳）『目録と分類』勁草書房, 1987,418p.
- ポールS.ダンキン（高鷲忠美ほか訳）『目録規則の成立と展開』早川図書,1978,242p.

先行研究3：日本における図書館情報学の議論史研究

- 河井弘志『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』日本図書館協会, 1987,483p.
- 新藤透「明治期に於ける「選書論」の検討」『日本図書館情報学会誌』59（1），2013，p．1-16.
- 武井権内『日本図書館学史序説』理想社,1960.477p.
- 三浦太郎「図書館史における学説史研究試論：日本近代図書館黎明期の解釈をめぐって」『現代の図書館・図書館思想の形成と展開』川崎良孝, 吉田右子編,京都図書館情報学研究会, 2017, p. 209-225.

先行研究と本研究との比較

特に,本研究とテーマ的に近いと考えられる志保田の博士論文と,本研究との差異

志保田務の研究：

・日本の目録規則とその標準化の歴史を扱う

・明治・大正期の目録に関する議論についての記述は限られている

本研究

・明治・大正期の目録に関する議論について総覧する

論文の構成と概要

	概要	研究課題への対応
第1章	序論（研究の背景など）	
第2章	明治・大正期の目録を巡る議論の歴史を整理	研究課題1に対応
第3章	明治・大正期の日本において,目録の目的はどのように考えられていたかを明らかにした	研究課題2に対応
第4章	目録規則と目録作業の標準化についてどのような議論が書かれていたかを明らかにした	研究課題3に対応
第5章	明治・大正期の日本において, 辞書体目録と分類目録,カード目録と冊子体目録といった目録の形式について,どのような議論が書かれていたかを明らかにした	研究課題4に対応
第6章	明治・大正期の日本において, 標目統一についてどのような考えがあったかを明らかにした	研究課題5に対応
第7章	結論（各研究課題の総括、今後の展望）	

2.明治・大正期日本の目録を巡る議論の概要

2章の構成と概要

・欧米の目録規則発展の歴史

・明治・大正期の日本における目録に関する議論

欧米の目録規則発展の歴史

西暦	出来事
1759	大英博物館図書館が一般向けに開館,大英博物館図書館で目録作成開始
1787	大英博物館図書館で最初の目録発行
1791	フレンチコード成立
1841	A.G.M.パニッツィ,91カ条目録規則作成
1852	C.C.ジュエット,39カ条の目録規則作成
1875	C.A.カッター,辞書体目録規則作成
1881	イギリス図書館協会,目録規則制定
1883	アメリカ図書館協会,目録規則制定
1908	英米合同目録規則制定

明治・大正期の日本における目録に関する議論

- 1870年代以降、帝国図書館、帝国大学附属図書館も目録を作成開始
- 文献リスト「我ガ国ニ於ケル目録法ノ研究」を参考にして、39点の文献を考察の対象とする（他国の文献の翻訳に過ぎないもの等を除外）
- 量的にもっとも多い議論のテーマは,辞書体目録と分類目録,カード目録と冊子体目録の比較といった,目録の形式に関する議論であった
  →第5章で詳述
- 量的にはこれに劣るものの,重要な目録に関する議論のテーマとして,目録の目的,目録規則と目録作業の標準化,標目統一について論じられていたことがわかった→第3，4，6章で詳述
- その他,索引や排列に関する議論も存在

3.目録の目的に関する議論

3章の構成と概要

・目録の目的に関する議論
・目録の目的論における利用者の重視
・利用者の目的論
・児童に対する目録の原則不要論から見る目録の目的
・その他の情報管理概念から見る目録の目的

目録の目的に関する議論

1892年：西村竹間「目録編纂法」（『図書館管理法』）
1896年：和田万吉「書目 其種類及び編纂法」
1915年：日本図書館協会『図書館小識』

目録の目的論における利用者の重視

・和田万吉：明治期から目録の目的として利用者の
利便性を重視する考え方

→大正期に入ると,目録のそもそもの根本的な目的論として,利用者のためのものである旨を明確に示した記述が多く見られるようになる

背景：日本では,大正期にかけて,図書館,蔵書,利用者の数が増加していったため,図書館が利用者を重視する姿勢を見せるようになったことが考えられる

利用者の目的論

明治・大正期の目録の目的論においては基本的には「検索」の機能が重視されがちであった

→和田万吉は,それに加えて「集中」「特定」のみならず「関連資料発見」の機能まで言及

児童に対する目録の原則不要論から見る目録の目的

・林靖一

児童に対しては,書庫を開架制にすることによって一般的な索引用目録は無用であるとする論を展開

→ 目録よりもむしろ推薦図書リストの必要性を主張

→林靖一は,目録の目的は,閉架制の書庫内の図書を検索するためのものであり,開架制にすれば目録は不要となると考えていた

→実際には,その後,多くの日本の図書館は閉架制から開架制に移行したものの,目録は不要とならず,むしろより一層整備されていくこととなった

その他の情報管理概念から見る目録の目的

・目録に関し, 図書や雑誌などに関する書誌的な記述以外の情報を記述するという概念はほとんど浸透していなかった
（知識資源の管理に関する情報などの記入については述べられず）

→目録の目的は,専ら,書誌的な記述を行うことと考えられていた

4.目録規則と目録作業の標準化に関する議論

4章の構成と概要

・欧米における目録規則と目録作業の標準化の議論の歴史
・日本における目録規則と目録作業の標準化に関する議論
・日本と欧米の目録規則と目録作業の標準化に関する議論の比較

欧米における目録規則と目録作業の標準化の議論の歴史①

・C.C.ジュエット

目録規則の議論：書籍の所在の特定,有用な書誌的情報,図書館間の資料交換用の資料案内,統一性の向上,アメリカおよび将来の普遍的書誌の可能性拡大の重要性を指摘

目録作業の議論：各図書館による目録項目の提出,個々の項目の定型化,簡単な目録規則の統一と印刷による目録作成による重複作業の排除を主張

欧米における目録規則と目録作業の標準化の議論の歴史②

・C.A.カッター

目録規則の議論：利用者の利便性と習慣の重視,具体的かつ一貫した主題の記載の原則,著者の全ての図書を一か所にまとめて配置することを主張

→目録作業の観点から,目録作成をパターン化させるという批判も存在

日本における目録規則と目録作業の標準化に関する議論①

1910年：加藤万作「標準目録の編纂に対する希望」

1914年：今井貫一「図書館管理様式の画一及様式の研究」

1918年：田中敬『図書館教育』

日本における目録規則と目録作業の標準化に関する議論②

加藤万作：英米合同目録規則の限界を指摘

今井貫一：目録規則のあり方として,和漢書,洋書のそれぞれで目録規則を定めて統一すること,カード目録の様式,各項記入の位置等を統一し,件名,著者名,一部の書名をABC順で組み立てて辞書体目録で統一することを主張

田中敬：目録規則のあり方として,和漢書と洋書の目録規則を洋書に合わせる形で統一することを主張

日本と欧米の目録規則と目録作業の標準化に関する議論の比較

日本における特徴

・和漢書と洋書の目録規則を分けるか統一するかが議論の焦点

・目録規則の統一が目録作成をパターン化させるという批判は表立っては存在しなかった

日本と欧米で共通

・目録規則の目的として,図書館員と利用者,双方の利便性の向上を意識

・目録規則の標準化が進む背景に,印刷技術の発展に伴う目録カードの印刷という目録作業の革新が存在

5.目録の形式に関する議論

5章の構成と概要

・目録の形式に関する議論
・議論のまとめ
・辞書体目録と日本の図書館界

目録の形式に関する議論

和田万吉,西村竹間,田中稲城,太田為三郎,植松安,竹内善作,今沢慈海らが目録の形式に関する議論を発表

- 和田万吉：冊子体目録を否定しカード目録を肯定的に捉える、辞書体目録を肯定
- 西村竹間・田中稲城：カード目録及び辞書体目録という新しいツールを重視
- 太田為三郎：カード目録を肯定
- 植松安：カード目録の利点、欠点を論評
- 竹内善作：辞書体目録に否定的
- 今沢慈海：辞書体目録の定義を刷新（分類目録を組み込む）

議論のまとめ①

・明治期においては,カード目録か冊子体目録か，また，分類目録か辞書体目録か，このいずれを実務において用いるべきかが考察の中心に据えられていた

→このうちカード目録と辞書体目録を肯定的に捉えていることを示唆する議論が見られた

・辞書体目録の定義は当時としても妥当なものではなく,概念理解においていささかの混乱が見られた

議論のまとめ②

・大正期においても,分類目録と辞書体目録のいずれが優れた形式かという議論においては,辞書体目録が肯定的に捉えられる傾向

→しかし、単純な「分類目録か辞書体目録か」という対立の構図をとらず,「著者目録,書名目録,件名目録に加えて分類目録をも組み込んだもの」として辞書体目録を捉える考えが見られた

（※ここでの「分類目録」は類目を件名として取り扱ったもの）

議論のまとめ③

- 辞書体目録を肯定的に捉える論者が大勢を占める中,竹内善作は辞書体目録を否定的に捉えた
- 冊子体目録とカード目録の比較について言えば,大正期も,新しいツールであるカード目録を肯定的に捉える考えが引き続き見られた
- 和田万吉によってシーフ目録が紹介された

辞書体目録と日本の図書館界

・明治・大正期において,ほぼ一貫して称揚される傾向にあった辞書体目録は,結局のところ,日本の図書館界においてはほとんど根づかなかった

（鈴木嘉弘による講演、『京都大学附属図書館六十年史』における記述）

6.標目統一に関する議論

6章の構成と概要

・標目統一に関わる概念整理
・欧米における著者名統一の議論史
・日本における著者名統一に関する議論
・日本と欧米の著者名統一に関する議論の比較
・著者名以外の標目の統一に関する議論

標目統一に関わる概念整理

本章における主要な用語の定義

典拠コントロール：1970年代末頃に見られるようになった表現。標目調整,相互参照,典拠管理という3概念すべてを包含した概念

標目統一：大正期以前の欧米および日本における,標目調整,相互参照,典拠管理に関わる概念。「典拠コントロール」概念との差異として,必ずしもこの3概念すべてを包含する必要はなく,1概念であっても包含している場合,この表現によって表す

標目調整：標目の形を別の書誌データの標目の形に揃えること

相互参照：揃えられた標目間において,相互に参照できるよう標記すること

典拠管理：揃えられた標目に関するデータを記述し,整理して管理すること

欧米における著者名統一の議論史

発表年	目録規則等の名称	標目調整	相互参照	典拠管理
1841	A.G.M.パニッツィの91カ条目録規則	○	○	×
1876	C.A.カッターのRules for a Printed Dictionary Catalog	○	○	×
1899	アメリカ議会図書館の規則	○	○	○
1904	C.A.カッターのRules for a Printed Dictionary Catalog第4版	○	○	○
1908	アメリカ図書館協会およびイギリス図書館協会による合同目録規則Catalog Rules : Author and Title Entries	○	○	×

日本における著者名統一に関する議論①

1910年：太田為三郎「書目の編纂附著者名」
1911年：和田万吉「目録編纂者は著作者に親しみ居らざるべからず」
1920年：和田万吉「図書館の和漢書目録に存する一二の根本的欠点」

日本における著者名統一に関する議論②

太田為三郎,和田万吉の著者名統一観

発表年	著者	標目調整	相互参照	典拠管理
1910	太田為三郎	○	×	×
1911	和田万吉	○	×	×
1920	和田万吉	○	○	×

日本における著者名統一に関する議論③

太田為三郎,和田万吉が主張した著者名統一がもたらすメリット

発表年	著者	著者名統一がもたらすメリット
1910	太田為三郎	・書目上の統一がつく ・読者を迷わしめない
1911	和田万吉	・検書家を誤導しない ・同じ人の著作が分散しない ・区別すべきを区別できる（父子同名の場合）
1920	和田万吉	・同一人を三人にも五人にもしない

日本における著者名統一に関する議論④

太田為三郎,和田万吉が主張した著者名統一がもたらすメリットにおいて重視している機能

発表年	著者	集中	特定
1910	太田為三郎	○	○
1911	和田万吉	○	○
1920	和田万吉	○	×

日本と欧米の著者名統一に関する議論の比較

アメリカ議会図書館の規則, Rules for a Printed Dictionary Catalogの第4版：典拠管理の必要性も述べられる

→しかし,太田為三郎,和田万吉はともに,典拠管理の必要性について認識していなかった

→背景として,日本ではコピーカタロギングを前提とした集団作業としての目録作成が考慮されておらず,目録の作成は個人作業と見られていた

著者名以外の標目の統一に関する議論

・現代日本の目録では,著者名以外に件名や著作の典拠データも作られ,出版者，シリーズ名の典拠データも一部存在

→明治・大正期において,著者名以外の標目を統一するという考え方は全く見られなかった

→その背景として、当時,現在の著作概念に相当する概念での標目統一を行うという発想が見られなかったこと、件名についても本格的な議論は始まっていなかったことが挙げられる

7.総合考察・結論

研究課題の総括

研究課題1：明治・大正期の日本において,目録についてどのような議論が書かれていたかを総体として明らかにする

研究課題2：明治・大正期の日本において,目録の目的についてどのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究課題3：明治・大正期の日本において,目録規則と目録作業の標準化についてどのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究課題4：明治・大正期の日本において,辞書体目録と分類目録,カード目録と冊子体目録といった目録の形式について,どのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究課題5:明治・大正期の日本において,標目統一についてどのような議論が書かれていたかを明らかにする

研究課題1の考察

・明治・大正期を通じて,量的にもっとも多い議論のテーマは,辞書体目録と分類目録,カード目録と冊子体目録の比較といった,目録の形式に関する議論

→詳細は,研究課題4において詳述

・量的にはこれに劣るものの,重要な目録に関する議論のテーマとして,目録の目的,目録規則と目録作業の標準化,標目統一について論じられていた

→研究課題2,3,5において詳述

・その他,索引や排列に関する議論も存在

研究課題2の考察

・明治期から利用者を意識した表現は存在

→大正期に入ると,より一層,目録のそもそもの根本的な目的論として,利用者のためのものである旨を明確に示した記述が多く見られるようになった

・基本的には「検索」の機能が重視されがちであった

・目録の目的は,閉架制の書庫内の図書を検索するためのものであり,開架制にすれば目録は不要となるという思想が存在

・目録の目的は,専ら,書誌的な記述を行うことと考えられていた

研究課題3の考察①

・和漢書,洋書のそれぞれで目録規則を定めて統一すること,カード目録の様式,各項記入の位置等を統一し,件名,著者名,一部の書名をABC順で組み立てて辞書体目録で統一することを主張
・後には,和漢書と洋書の目録規則を洋書に合わせる形で統一することが主張された

→欧米の目録規則に関する議論と比較して,日本における特徴としては,和漢書と洋書の目録規則を分けるか統一するかが議論の焦点

研究課題3の考察②

・目録規則の目的として,図書館員と利用者,双方の利便性の向上を意識している点については,日本も欧米と同様
・日本でも欧米でも印刷目録カード頒布の提案
→目録規則の標準化が進んだ背景には,印刷技術の発展に伴う目録カードの印刷という目録作業の革新が存在
・日本においては,欧米と異なり,目録規則の統一が目録作成をパターン化させるという批判は表立っては存在しなかった

研究課題4の考察

・カード目録か冊子体目録か，また，分類目録か辞書体目録か，このいずれを実務において用いるべきかが考察の中心に据えられていた

→カード目録と辞書体目録を肯定的に捉えていることを示唆する言説が見られた

研究課題5の考察

・明治・大正期の日本においては標目調整や相互参照に関する議論は存在したが,典拠管理については考慮されていなかった

→背景として、コピーカタロギングを前提とした集団作業としての目録作成が考慮されておらず,目録の作成は個人作業と見られていたことがあると考察できる

・著者名以外の標目を統一するという考え方は全く見られなかった

結論①

・明治・大正期の図書館目録に関する文献を可能な限り網羅的に収集し,分析することによって,まずは目録についてどのような議論が行われていたか,その総合的な全体像を示し,さらには複数の論点に基づき,その議論の内容をより詳細に分析

（主要なテーマが目録の形式に関する議論であったことが判明）

→従来,断片的にしか記述されてこなかった明治・大正期の図書館目録に関する議論の変遷を,論点別に縦覧することが可能に

結論②

・明治・大正期における議論に見られる図書館目録の目的は「検索」「集中」「特定」「関連資料発見」であり,こうした目録の目的に関する考え方は,現代の目録を巡る議論においても,表現の違いや概念範囲の差異などが存在したとしても,本質的な変化は存在せず,今なお目録の目的であり続けている

→現在,今後の目録のあり方について考えるにあたっても,本研究が示した明治・大正期日本の目録の歴史は,目録の普遍的な目的について振り返る一助に

結論③

本研究の意義

・現在,カード目録を使用している図書館が存在しても,冊子体目録を使用している図書館はほとんど存在していないことの理解

→カード目録が明治期以降、高く評価された

・明治期の、開架制に伴う目録不要論と目録の利用者重視

→現代の図書館では開架制に移行したものの目録は不要とならずむしろより一層整備された

→明治・大正期の議論は現在の目録の実践へと結びついている

本研究の限界と今後の課題①

限界

- 明治,大正期に出版された,図書館学の領域以外の雑誌や図書において,本研究のテーマに則した記述が存在した可能性は否定できない
- 各議論の内容と,その議論を主張した図書館関係者の思想全体とを比較し検討するような考察は行わなかった
  （各人の思想について,目録と関連付けて論じることの困難さが背景）

本研究の限界と今後の課題②

新たに導出された課題

- 同時代における,分析書誌学における目録に関する議論,また,出版目録に関する議論の研究
- 主題目録法における議論が記述目録法における議論との相互作用についての研究
- 明治・大正期の図書館界における目録作成の実践についての研究（辞書体目録が実際には主流とならなかった理由の解明）
- 用語の定義の観点からのより詳細な分析
- 先行研究と異なる視点による昭和期以降の目録の議論の整理

主要参考文献

1.序論

・Hider, Philip “Origins of the Knowledge Organization Field”, Birger Hjørland and Claudio Gnoli ed., Encyclopedia of Knowledge Organization,2020, <https://www.isko.org/cyclo/origins>.［引用日：2025-07-16］
・Joachim, Martin D. ed., Historical Aspects of Cataloging and Classification, New York, Haworth Information Press, 2003, 604p.
・L.M.チャン（上田修一ほか訳）『目録と分類』勁草書房,1987,418p.
・ポールS.ダンキン（高鷲忠美ほか訳）『目録規則の成立と展開』早川図書,1978,242p.
・天野敬太郎「我ガ国ニ於ケル目録法ノ研究」『図書館研究』12（4），1939，p．407-483．
・澁川雅俊『目録の歴史』勁草書房,1985,212p.
・志保田務『日本における図書館目録法の標準化と目録理論の発展に関する研究』学芸図書，2005，238p．
・新藤透「明治期に於ける「選書論」の検討」『日本図書館情報学会誌』59（1），2013，p．1-16．
・武井権内『日本図書館学史序説』理想社,1960,477p.
・藤倉恵一『日本十進分類法の成立と展開 : 日本の「標準」への道程1928-1949』樹村房,2018,310p.
・三浦太郎「図書館史における議論史研究試論 : 日本近代図書館黎明期の解釈をめぐって」『現代の図書館・図書館思想の形成と展開』川崎良孝, 吉田右子編,京都図書館情報学研究会, 2017, p. 209-225.
・和中幹雄「『学校図書館』誌における記入論争1951～1955」『メタデータ評論』1，2021，p．24-46．

2.明治・大正期日本の目録を巡る議論の概要

・天野敬太郎「我ガ国二於ケル目録法ノ研究」『図書館研究』12（4），1939，p.407-483.
・澁川雅俊『目録の歴史』勁草書房,1985, 212p.
・高橋泰四郎「基本記入から見た目録規則の発展」『図書館研究シリーズ』7, 1962,p.55-91.
・高橋泰四郎「基本記入から見た目録規則の発展（２）」『図書館研究シリーズ』9,1965, p.159-170.
・東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史, 部局史 4』東京大学,1987,1376p.
・藤野幸雄編著『図書館を育てた人々 外国編 I アメリカ』日本図書館協会,1984, 216p, xiiip, 図版2枚.
・藤野幸雄,藤野寛之『図書館を育てた人々 イギリス編』日本図書館協会,2007, ix, 285p.

3.目録の目的に関する議論

・西村竹間『図書館管理法』金港堂，1892，p．14-22.
・日本図書館協会『図書館小識』日本図書館協会,1915, p.108-109.
・林靖一『図書の整理と利用法』大阪屋號書店,1925,547p.
・和田万吉「書目 其種類及び編纂法」『國學院雑誌』2（5），1896，p．1-16.

4.目録規則と目録作業の標準化に関する議論

- Hanson, Eugene R. and Daily, Jay E. “Catalogs and Cataloging: History [ELIS Classic]” , Encyclopedia of Library and Information Sciences 4th ed., John D. McDonald and Michael Levine-Clark ed., Boca Raton, CRC Press, 2018, p. 743-779.
- 今井貫一「図書館管理様式の画一及様式の研究」『図書館雑誌』19，1914,p.80-87.
- 加藤万作「標準目録の編纂に対する希望」『図書館雑誌』8，1910，p．15-19.
- 田中敬『図書館教育』同文館,1918,394p.

5.目録の形式に関する議論

・今沢慈海『図書館経営の理論及実際』叢文閣,1926,719p.
・植松安『教育と図書館』目黒書店,1917,256p.
・京都大学附属図書館編『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館,1961,p．107-110.
・鈴木嘉弘,今野創祐「研究例会報告　第350回」『図書館界』71（3）,2019,p.211-212.
・竹内善作「小図書館の目録編纂に就いて（上）」『市立図書館と其事業』14,1923,p.9.
・文部省『図書館管理法：全』金港堂書籍，1912，124p.
・和田万吉「本形目録に就きて」『図書館雑誌』24，1915,p.25-30.

6.標目統一に関する議論

- Kimura,Maiko, Name Authority Data and Its Model for Non-Latin Representations with Special Emphasis on Chinese Characters,博士論文,慶應義塾大学,2015,201p.
- 天野敬太郎『日本書誌の書誌　主題編第2』厳南堂書店,1984,342p.
- 太田為三郎「書目の編纂附著者名」『図書館雑誌』8，1910，p．19-26.
- 国立国会図書館,令和6年度書誌調整連絡会議報告,典拠データの動向，課題と展望（木村麻衣子（日本女子大学文学部日本文学科准教授））,30p.〈https://www.ndl.go.jp/jp/data/basic_policy/bib_control/conference/pdf/bib_r6_resume1.pdf〉．［引用日：2025-07-16］
- 和田万吉「目録編纂者は著作者に親しみ居らざるべからず」『図書館雑誌』12，1911，p.12-16.
- 和田万吉「図書館の和漢書目録に存する一二の根本的欠点」『図書館雑誌』41，1920，p.1-6.

7.結論

・京都大学附属図書館編『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館,1961, 3, 342p, 図版[1]枚.
・谷口祥一『知識資源のメタデータへのリンクトデータ・アプローチ』勁草書房, 2023, xvi, 348p.
・藤倉恵一「日本十進分類法の展開に関する歴史的研究」博士論文,筑波大学,2024,287p.